

# 「いい場所みつけれ！」 街の中をひっきりなしに佇む名店

**思** い立ったら、すぐにも出かけるクセがある。それがS子。行きあたりばったり、ということも多々あるのだけれど。

バイトまで6時間ほどあったので、最近気になっていた街へ行くことにした。化粧もそこそこに、巨大なサングラスをかけてごまかす。知り合いに会わないだろう、と根拠のない思い込みからの行動。そうすれば支度に10分もかからない。

なんとも女の子らしい『乙女の東京』という本に紹介されていた、国立にある老舗の喫茶店が目当てだった。「気になっていた街」と表現したのは、大袈裟か。正確には「気になっていた喫茶店」だから。

開店して約50年。階段を上り下りするだけで、すごい音がある。ギシギシ。若干、怖い。昔、石原慎太郎都知事も通っていたという、古めかしい喫茶店。手書きのメニューには年季が入っている。窓際のインテリア、電灯、木のテーブルなど、様々なも

のたちから昭和っぽい匂いが漂って素敵。最近、昭和レトロが流行っているとは聞くけど。

それでも、時代の潮流は喫茶店より「カフェ」だ。そんな中でもずっと変わることなく、それでいて盛況な喫茶店。若者の姿も目立つ。きっと一橋大学の学生だろう。愛される理由があるのだ。

店員のおじいさんが、内装同様味わい深い、と思いついちらちらと見てしまう。そんな気になるおじいさんも、その喫茶店のご愛嬌、なのかも。メニューにはボリュームがあり、しかも美味しいピザを注文し、デザートにパフェ。朝ごはんを食べないから、これくらいは良いんだ、と強く肯定して自分に言い聞かせるS子。食意地がはっているのは、大人になっても変わらないのだろうか。



## 交流合宿で得たグズグズ感 みんなでワザワザ!! 貴重な体験

美味しいし、その空間自体が心地良い。何時間でもいたくなる。S子も食事後、勉強まがいのことを1時間程度していた。混み具合を配慮し

て、店を出た。また、来ようと思わせてくれる店。今度はあの人と2人で来よう、かな。

(桃)

**サ**ークル合宿のできごと。

他校との交流を目的としていたため、そこには普段とは違った

面々がそろっていた。規模は30人にも満たない程度だが、3年にもなる「運営」という言葉が重くのしかかる。役に奔走せざるを得ない、といったところか。

なにしろ、食事の準備も、何もかもを、みんなで分担して行動するのである。その非効率さといったら……!!

立场上、口が裂けても言えないので書いてみたが、これがそが合宿運営のミソであることがこの度ようやく分かったのでここに報告する。

(然)

運営側の至るべき境地はどうやら、『1人でやれることを、ワザワザみんなでやることで得られるグズグズ感』であったようだ。私の場合は、みんなを楽しませることと自分が楽しむことというのは限りなく近い位置にあるので、このグズグズ感では自らの、ひいては執行部全体のレベルアップに寄与したといつてよいのではないかしら。あつぱれ、この清清しき爽りある感覚。

快晴のもと2泊3日の旅程は、短いようで、結構なハードスケジュール。うだるような暑さも、ハッスルも、流しそうめんも、青春もハッピーングも、すべてが凝縮されていた。貴重な、夏の体験。